



LA NOUVELLE

N°12

PRINTEMPS

東京外語仏友会
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト 東京外語会気付
発行責任者 藤倉洋一 (昭45)
2014.4.1 発行

第19回サロン仏友会

昨年11月23日(土)、恒例のサロン仏友会が本郷サテライトで開催された。講演は、岡本治男氏による「国際情勢の考え方」で大変好評を博した。その後、懇親パーティが、ボジョレ・ヌヴォと豪華なおードブル・おつまみを味わいながら、和やかな雰囲気の中で行われた。出席者は54名であった。講演会については、仏友会幹事である田中氏が寄稿してくれたので次に掲載する。

* * * * *

「国際情勢の考え方」を聴いて (講師：岡本治男さん)

田中清夫 (昭51)

講師の岡本さん(外務省非常勤=写真)は、昭和46年卒業で、在学中はボート部で活躍されたとのこと。一見してがっちりとした体格で、外交交渉も迫力を持ってされてきた方との印象を受けました。しかし、講演が始まると、さすがに外交官としての折り目の正しさと丁寧さが強く伝わってきました。信念を持って日本の為に尽くされてきたことにまず敬意を表したいと思います。



「ベルギーとスイスが、外交によって国の立場をどうやって維持しているか」を、外交官の立場からお話しいただきました。ベルギー、スイスは共に小国家でありながら、小さな巨人ともいえる国として存在を確立しています。又、多民族・多言語国家でありながら中立を維持するスイスと、欧州国際機関が集中し国際社会でも存在感の大きいベルギーが、夫々どのように

生き残っているのかの説明がありました。「ベルギーは遠心力、スイスは求心力」により、周辺の大国からの干渉を排除して生き残っているという喩えは、正に的を得た解釈だと思いました。このような姿を日本は学び、外交による独立性の維持を図るべきであると感じました。

さてベルギー王国についてのお話は、外交官でなければ知らない裏話や、ひょっとして今回書いてよいか迷うような話題もありました。日本の皇室がオランダ王室と今は親しくなった背景の説明で、ベルギー故ボードワン国王が皇室と王室の直接の会見をアレンジしたことなどは、もともと第二次世界大戦で日本の行なったオランダ捕虜への虐待の歴史があるいわく付のオランダ王室と日本の皇室が、マスコミの喧伝も手伝って、どうして今は親密だと世間で言っているかが判ったわけです。昭和天皇の大葬でベルギー王室が序列一位であった理由も納得です。又、ベルギー王室は、国内の多言語・多民族への配慮から、お妃を海外から迎えたことなど、王室が「君臨すれども統治せず」のイギリス王室と同じように、内政への配慮も行いながら、国を治めている姿もなるほどという内容でありました。

一方スイスについてのお話も、外交の最前線で活躍された方ならではの説得力がありとても判りやすい説明でした。ハプスブルグ家への対抗し生まれた連邦国家が、ドイツに屈せず、連合国の圧力にも屈せず、今でも中立を維持しています。戦争中には、米国の誤爆と称して爆撃を行ったこともあったそうです。国連には漸く参加したが、EUには参加しないという独立性を維持しています。スイスフランは健全です。軍事面でも国民皆兵や核兵器へのシェルターの準備など万全を期しています。今でもスイス人がバチカンの傭兵として活躍していることはよく知られています。大戦中ユダヤのお金は守るが、ユダヤ移民は受け入れないなど、きちんと自身の立場を主張して、外交でもそれを示し続けていることなど、単純な全方位外交の国とは大きく異なることも判りました。こうした是々非々のスイスに比



懇親パーティ会場の風景

べると、日本は、あれかこれかで清水の舞台から飛び降りる国のように思えてきます。

最後に、特定秘密保護法案の話も出ましたが、日本に話すと秘密が守れないという評判は本当なのだとわかりました。日本は、よし張り力で戦艦大和の建造を隠そうとした国です。そういうことだと思います。国家公務員が秘密をどう守るか、そして、どうやって開示するか考えさせる面もありました。米国の制度を導入するならば本来全て導入すべきで、なぜ30年後の開示では駄目なのか？日本は、30年を60年に伸ばして、全く別の制度にしてしまい、一見大きく改善したかにみえますが、実は国益と公務員の緊張度合いを奪う制度にしてしまいました。こうした議論を国内できちんとできないと、外交をバックアップできないのではないかと思います。

講演では、外交の背景には、言うに言えない色々な理由・事情があることを実感するという新たな発見もありましたし、今後の日本の外交・政治の姿勢など、様々なことを考えるいい機会ともなりました。文中、私が個人として考えたことも記述してしまいましたが、講演に関する報告としてご理解いただければと思います。



《キャンパスから》 学部改組とフランス語科

東京外国語大学教授 川口裕司 (昭56)

2012年4月、外国語学部がなくなり、言語文化学部と国際社会学部の二学部制に移行したことはご存じのことと思う。以前の東京外国語大学外国語学部という名称は、親と子の名前が全く同じで、冗語的で関係のわかりにくい命名であった。それに比べると言語文化と国際社会はすっきりしていてわかりやすいと言える。とは言うものの、今回の学部改組による受験生の混乱はかなり大きく、学部を選択するときにとっても迷っていると聞く。その原因はどこにあるのだろうか。改組の宣伝が足りなかったことは否めない。しかしそれ以上に、この話をすると決まって卒業生たちが「言語文化学部は昔の外国語学部なんですか」、「言語文化学部は以前のまなんですか」といった質問をすることの裏に、今回の学部改組の問題点が見え隠れしているように思う。



受験生の混乱と卒業生の不安は起こるべくして起きている。多くの大学においては、新学部を設置するということは、旧学部のほかに新学部を増設することを意味する。ところが外語大の場合、旧学部を二つに分割して学部改組を行った。文字通り、旧学部とあっさりおさらばしてしまったのだ。受験生や卒業生には老舗の看板を下ろした理由が当然よくわからない。だからこそ新学部においても、いずれが旧外国語学部の正統の後継者なのかを見極めたいわけだ。今にして思えば、老舗のブランド名を残したまま、言語文化学科と国際社会学科とに暖簾分けするという選択肢もあり得た筈だが、なぜか当時の執行部はそうしなかった。やはり親と子の名前のせいだったのだろうか。

仏友会の会員にとって一番大きな関心事は、こうした改組を経たことでフランス語科がどうなったのかということであろう。実を言えば、フランス語科という名称は、筆者が外語大に赴任した1995年4月の時点でもはや存在していない。この20年前の改組によって、フランス語科は欧米第二課程フランス語専攻と名称変更された。今回はそのフランス語専攻すら消えてしまった。だからと言って悲観的になるのは時期尚早である。フランス語科が実質的に消滅していないことは、新学部になった後の外語祭の料理店や語劇を見れば誰の目にも明らかだ。言語文化学部は今もフランス語を募集単位にしているし、

国際社会学部の募集単位も西南ヨーロッパ第一地域(フランス語・イタリア語)となっている。フランス語科もフランス語専攻も姿を消してしまったが、その精神は換骨奪胎され、フランス語という言語への帰属意識となって、今も両学部の学生をしっかりと結びつけている。どうか安心していただきたい。

第19回仏友会総会のお知らせ

日時：2014年4月19日(土) 午後2時～5時
午後2時～総会、2時30分～講演
3時40分～写真撮影&懇親会

会場：大手町サンケイプラザ 201, 202号室
(東京メトロ大手町 E1出口)

参加費：5,000円 2014年分通信費(1,000円)も同時に、受け付けます。

《講演》 午後2時～3時半

講師：中村昭彦氏(昭和31年卒)
翻訳・著述家

演題：「スクリーンの前と後」

中村さんはスイス航空に勤務する前、「恋人たち」、「死刑台のエレベーター」などを公開した、外国映画の輸入・配給業の大手、映配株式会社に5年半勤務されたご経験から、その後の映画業界の今に至る激変に詳しく、私たちの人生を彩り豊かにしてくれる映画観賞に役立つヒントなども愉快地語っていただきます。

申込み〆切：4月6日(日)迄

3月中旬にメルアド登録会員にはe-mailで、それ以外の登録会員には往復はがきでご案内しています。

連絡先：藤倉洋一(昭45)

fujikura1639919@waltz.ocn.ne.jp

Tel/Fax 048-822-4540

勝亦杏子(昭46)

anzuko@k08.itscom.net



《大切なお知らせ》

・・・会報誌「LA NOUVELLE」送付について・・・

いつもお読みいただき有難うございます。初刊以来、当会報誌の作成や送付等にかかる経費は、皆さまからお預かりする通信費(年1,000円)で全てを賄っています。そのやりくりの中で、大勢の方にお届けしたいと願いつつも、通信費長期未納の方への送付には、毎回苦慮してきました。そこで、今回検討の結果、次の秋号(13号)からは「2年以上の通信費未納の方には、会報誌送付は中断させていただきます」ことになりました。どうぞご理解とご了承を頂きたくよろしくお願いいたします。

《仏友会へのお誘い》

皆さま、お仲間へのお声かけを引き続き宜しくお願いいたします。その際には以下のメモをどうぞ活用ください。

~~~~~仏友会に関する参考メモ~~~~~

#### I. 入会・登録方法

(1) 連絡先：副会長 和賀千恵子(昭45)  
waga3s07@tbc.t-com.ne.jp

#### (2) 連絡事項

- ①氏名(ふりがな)と住所
- ②卒業年度(在校生の場合は学年)
- ③メール・アドレス、電話番号

(上記の個人情報は会報誌送付用であり、他の目的では使用しません)

(3) 通信費支払(同封の振替用紙にて)：年間1,000円  
複数年(例えば3年)も可

通信費を支払った方は「登録会員」として登録し、会報誌をお届けします。

通信費2年以上未納の方は「登録会員」の資格を失うものとし、会報誌送付を中断させていただきます。

#### II. 年2回の仏友会イベント

- (1) 総会：4月(於：サンケイプラザ)
- (2) サロン仏友会：11月のボジョレ・ヌヴォ解禁後の土曜(於：本郷サテライト)

(1)(2)ともに、講演会と懇親パーティあり。  
参加費は(1)5,000円、(2)3,000円の予定。

#### III. 会報誌「LA NOUVELLE」のバックナンバー

2008年に発刊。No.1～No.11は川口裕司教授のホームページ内、「東京外語仏友会」からご覧いただけます。

<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/ykawa/>



## 《パリ便り》

### ユネスコを舞台に日々新たな挑戦

諸橋 淳 (平成7)

初めてフランスを旅したのは学部2年の夏。覚えたての危ういフランス語を駆使して、パリやリヨン、南仏を列車で巡った。地図を頼りに大きく重たいリュックを背負って。若くなければできない旅である。あれから20年以上が経ち、今ではすっかりこの街がホームタウンになっている。国連教育科学文化機関(ユネスコ)に勤めるようになって今年で15年目。フランスのエッセンスだけではなく、インターカレッジでパワフルな職場である。外語の学生も留学生も含め個性的かつ魅力的な人が多く、日本でありながら日本でないようなキャンパスの雰囲気が私は大好きだったのだが、ユネスコにも若干そんな空気がある。



世界遺産で有名なユネスコだが、実際どんな仕事をしているのかとよく聞かれる。ユネスコの創設の歴史には、国際舞台で

活躍し、「武士道」を英語で書いた、私の尊敬する国際人・新渡戸稲造も関わっている。「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」とユネスコ憲章(1945)の前文にある。「世界の諸人民の教育、科学及び文化上の関係を通じて、国際連合の設立の目的であり、且つその憲章が宣言している国際平和と人類の共通の福祉という目的を促進するために、ここに国際連合教育科学文化機関を創設する。」と続く。

私自身は教育局に勤務し、平和・人権教育専門官として、195あるユネスコ加盟国の教育政策にグローバルな見地から働きかけるといような事業に携わっている。全ての子供のウェルビーイングをテーマに、具体的には学校でのいじめ・暴力問題への政策面からの取り組み強化、児童生徒の態度・行動に働きかけるための教育手法の開発、教職員へのサポート態勢作りなどである。

ユネスコは現在「グローバルシチズンシップ教育」の促進に力を入れている。グローバルな視野を持ち、地球社会の市民として人類共通の目的(貧困撲滅、紛争解決、平和構築、持続可能な開発など)のために具体的に貢献できるスキルを持った世

## 夜の母校(語劇リハーサル見学記)

和賀千恵子(昭45)

●「サロン仏友会」が開かれる11月は毎年文化活動が目白押し。母校でも20日すぎから週末にかけて恒例の外語祭が開催され、伝統ある「外語名物の語劇」が一斉に上演されます。●学生達との交流と支援を目指し、仏友会は数年前から、後輩達によるフランス語劇活動を応援してきました。前回の「美女と野獣」に引き続き、2013年の演目は、「シラノ・ド・ベルジュラック(恋文の達人故に悩める男の話ーエドモン・ロスタン作1897初演)」に決定。しかし、この公演日が「サロン仏友会」開催日に重なると分かり、当日の観劇は諦め、練習現場で学生達を「激励訪問」することになりました。●公演を26日後に控えた10月最後の日曜の夜、舞台稽古の時間に合わせて現役時代に「語劇で大役」経験のある藤倉会長を先頭に、勝亦幹事と3人で出かけました。●JRと西武多摩川線の乗り換えにエスカレーター登場、また多磨駅周辺も賑やかさを増した等、数年ぶりの景色の変化にすっかり気を取られているうちに、母校の敷地内に到着。●既に陽は落ちて、目指す会場アゴラグローバル館は闇の中。入り口近くのわずかな灯りの中、突然と現れた人影に驚く間もなく、待ち受けていた学生達からの熱い歓迎を受けました。●竹村茉佑子代表と清水美穂監督と挨拶を交わして、会場であるプロメテウスホールへ移動。この建物の建設(2010年)に際し、資金協力をした証である「仏友会の名入りの金色プレート」付きの特別席を探し、来賓気分でもって着席。●ホール内には、意外にも多くの学生が其々の役割ごとに集結。現在、語劇は2年生全体の取り組みであると聞き、羨ましく納得しました。●さて壇上では、出演者達による場面ごとの立ち位置や演技のタイミングの確認が、自主的に、しかも淡々と進められました。しかし、観る側にとっては、彼らの

動作と一部の台詞を頼りに場面を理解するのは困難。そのうち、何人かの女子学生が頼もしく男役を演じていることがわかり、「見学」は、どれが本当の女役であるかを当てる「絵解き」作業となりました。●主役のシラノを演じるは、男子学生。その爽やかな面立ちに、この役の看板である「大きな鼻〜」を重ね合わせるのも容易ではなく、メイクや衣装の有難さを改めて痛感。最後まで、本番とは一味違った観客体験でした。●稽古終了後は、ロビーで仏友会からの祝金の授与と、役から解放された学生達と賑やかな記念撮影で盛り上がり、和やかに無事解散。彼らの晴れの姿を想像しながら、夜の母校を後にしました。



語劇出演者らと：前列左端が藤倉会長、前列右端が和賀副会長(幹事勝亦撮影)

○後日、竹村代表から、「公演は、立ち見が出るほどの満席で、クオリティも高いとの好評を得ました」との連絡をいただきました。

代を育てるための教育を、各国政府や民間と協力しながら進めていこうとするものである。私もチームの一員としてこの事業に参加している。本部での活動は、グローバルな視点からの政策面への働きかけが中心で、トップダウンにならざるを得ないという意味で限界もある。世界各地の地域事務所や各国の教育省などとの連携が重要になる。また、グローバル化がどれだけ進んでも国民国家という仕組みはやはりなくなり、崇高な理想とジオポリティクスとの狭間でジレンマに悩むこともある。一筋縄ではいかない世界の現実を前に、理想の教育を実際どこまで押し進められるか、日々新たな挑戦である。

国籍、言語、宗教、ジェンダー、価値観・・・一人一人違いはあっても、共通の目的のために共に知恵を絞り、汗を流す。その努力が実った時の喜びは何物にも代え難い。国際公務員として日々そんな経験をさせていただいているが、将来この世界の行く末を背負って立つ今の日本の子供たちや若い人たちにもそんな喜びを知って欲しいと切に願っている。そうしたことに今の自分の仕事がほんの少しでも役に立てば幸いである。

## 《新幹事紹介》

三浦房子(昭51)

英語教材編集の仕事で30年以上続けています。昨年、偶然に仏友会の存在を知り、総会に参加したのが縁で幹事になってしまいました?!少しでも会の発展のお手伝いできれば、と思っています。よろしくお願いたします。



(会長コメント：好奇心が旺盛で、文芸を含むエンターテインメントには稼いだ果実をすべて投資するくらいの貪欲さが素晴らしい。今でも毎月2回フランス人講師や友人たちとフランス語の学習を続けているそうで、仏友会幹事としての活躍を大いに期待しています)

## 《幹事のつぶやき》

### 富永太郎と中原中也

内海和夫(昭54)

明治30年外語の廊下でフランス語科一期生滝村立太郎は支那語科一期生永井壯吉(荷風)との立ち話を目撃されている。卒業後即教壇に登った滝村は多くの人材を学生に迎えるが、大正11年入学の富永太郎は昭和6年の中原中也外語入学を誘った形だ。2007年県立神奈川近代文学館は「二つのいのちの火花」の相似性を多面的に視覚化している。ペルレーヌとランボーを耽読する外語学生と立命館中学生の京都での運命的な邂逅は中也が自ら解き明かしを図っている。富永を追って上京した中也はアテネフランセに山内義雄(大正4)を、外語に滝村を探って、夭逝した富永の影を追慕した形だ。荷風の断腸亭日乗に頻出する高橋邦太郎(大正11)が滝村の弟子である以上、高橋が荷風と滝村の目撃談に触れる時因果は一頻り巡ったことになる。

## 昔日の青春 佛友會々報

### 80年のタイムカプセルを開ける7

坂井英俊(昭40)

昭和10年6月刊への寄稿。満州国皇帝・愛新覺羅溥儀は映画「ラスト・エンペラー」の主人公その人であるが、以下は来日の満州国皇帝に近侍した先輩・山縣武夫氏(海軍予備中佐・宮内省式部官)より寄せられた「満州国皇帝陛下に近侍して」。貴重な報告である。(抜粋・太字指定・注は筆者)



来日の皇帝・溥儀

＜満州国皇帝陛下は(昭和九年)五月二日早朝新京を御出発、同日午後五時半大連に於て軍艦比叺に召され六日午前九時半横浜に御安着になりました。就中感激致しました事は、船中に於て神武天皇祭を迎へたことで、皇帝陛下には乗員一同と共に上甲板に出でさせられ、いとも厳肅に御遥拝を遊ばされたことで、我々接伴員は勿論乗員一同誠に感慨無量なるものがありました。

(日本の皇太后陛下へは)御母の如く御慕ひ遊ばされ、涙なくては之の情景を拝し得なかつたと側近が洩らして居りました。御陪乗の橋本陸軍次官に「(明治大帝の)御陵では感極まり涙の潤うを覚えた。時しも天雨を降らせしは正しく我心天に通じたるか」と御眼を拭われ、御胸を抑へられつつ仰せられたとのことであります。一巡査が母親の危篤を外にして任務を完了し

た美談を聞召され「日本人はまことに偉い。自分は心から感動した」と仰せられ、しばし御黙想遊ばされたとのことです。雨中いたいけなる小学生の直立不動の姿勢で奉迎せる、又畑に働く百姓が頬かむりをとりて合掌せる、漁夫の御召艦に近寄り歓迎の誠意を披露せる、また遠き島々の住民が日満国旗を打振って歓呼するなど、上は畏くも皇室の御歓待より、下は津々浦々の人民に至るまで国を挙げて表示したる溢るごとき熱誠に対しては、恙なく御帰国遊ばされました事は全く日満両国民の至誠神明に通じたものに因ることとまことに恐悦至極に存する次第であります>。(注)皇帝はこの間に「天照大神を奉じ、建国神廟を創建したき念願であります」と天皇へ上奏し、また清朝親親王の王女・川島芳子の養父・川島浪速邸を訪問している。皇帝溥儀は、燃えるような誇りと屈辱との狭間にありながらも、この行事を誠心誠意演じていたのであろうか。

時移って、あの東京裁判「国際法廷」では、それまで顔なじみになっていた板垣・土肥原・南・東条・梅津ら戦争指導者の被告席には目もくれず、彼はじっとキーナン検事官を見つめたまま「証言」を始めた。「満州国の首領になれと板垣参謀から申し出たが、私は拒絶した。板垣は不快を表し、もし拒絶する時は断固たる処置に出ると言った。配下の勧めもあり、私はやむを得ず関東軍の申し出に屈服した。私は先ず満州へ入り機会を待って、一面では軍隊を養成し、他面では人材を育成し、適当な時期に中国軍と相呼応して失地を回復せんと考えて、虎穴にとびこんだのである。また「私は、後ろから日本軍に銃を突き付けられ仕方なくやった。傀儡で、騙され脅されて、仕方なしに皇帝となったのである。日

満議定書の締結も、私の批准を得てはいたが、実際は関東軍が一方的に押し付けたものであり、皇帝としての私は、何ら自由な手も口も持っていなかったのである。

歴史的にみて、皇帝とはその場面に合わせて如何様にも豹変するものらしい。＜王統護持>のためなら信義も道義も顧みないという特異な「大義」観からであろうか。なるほどローマ帝国にも劣らぬ強大華麗な清帝国、康熙帝・乾隆帝ら、世界一級の学問教養を備えた賢帝たちの輝かしい清朝を我が代(辛亥革命)で滅ぼした宣統帝の苦悩は深かったであろう。彼が関東軍の企みを利用して「お家再興」を夢見たとしても不思議はない。が、日本軍の描く満州帝国は、溥儀のそれとは似て非なるものだった。自らは共感能力を持たず相手の共感のみを強要する猛々しい関東軍に囲まれた孤立無援の彼に、何ができたであろうか。また「世が世なら」清朝の王女である「男装の麗人」川島芳子も、進んで関東軍内奥に入り込み存分に逆利用された挙句、漢奸(逆賊)として後日中国政府に処刑される。こうした愛新覺羅末裔たちのむごい人生、そのすべてが悲しい昔話となってしまった。

寄稿の山縣先輩は＜王道楽土・五族協和>の満州帝国を明るく信じ希望に溢れてみえる。が、後世の我々はそのすべてがほとんど互解し果てた事実を知っており、まさに諸行無常、ただ、遠い松風を悄然と聞く思いである。

(次回へ続く)